応接室

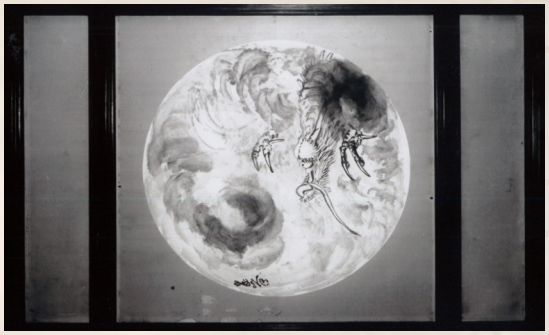
中国風の意匠でまとめられた部屋で、床には龍の敷瓦、天井には書画家・王一亭が描いた龍の天井画が4枚貼られています。

設計者である伊東忠太は、日本の建築も時代に合わせ進化するべきであるとする「建築進化論」を提唱した人物で、創建時の居住者である入澤達吉は、漢詩を趣味としました。この部屋には、両者の意向が反映されていると考えられます。この部屋は近衞居住期になっても、大きな改変をされずに使用されました。

天井画を描いた王一亭は上海出身の書画家で、入澤の日記には上海在住の知人を通し、王に龍画の揮毫依頼をしたことが記されています。また、近衞も王と交流を持ち、荻外荘には王から送られた掛軸が多数残されていました。

中央に置かれている螺鈿家具の彫刻部分は、古写真や同時代の螺鈿家具の類例を参考に、梅とカササギの透かし彫り、牡丹彫刻としました。

応接室（創建時）



龍の天井画（創建時）

応接室（復原後）

龍の敷瓦（復原後）